



一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society

Newsletter

13

2020.01

▶ 理事長あいさつ

一般社団法人日本肩関節学会理事長 池上博泰



日本肩関節学会会員の皆様、紙面をお借りしてご挨拶を申し上げます。

新しい年を迎えて会員の皆様にとりましていっそうの飛躍の年になることを祈念いたしますとともに、2020年も何卒よろしくお祈り申し上げます。

さて、2018年10月に理事長を拝命してはや1年3ヶ月が経過しました。ご支援頂きました会員、代議員の皆様には厚く御礼申し上げます。理事長を拝命して以来の本学会の重要な出来事を4点に絞ってご説明いたします。

1. 学術集会の開催

学会のもっとも大きな事業は学術集会の開催です。第46回学術集会が畑幸彦会長のもと長野市で開催されました(2019年10月25-26日)。皆様をご存知のように10月12日に日本に上陸した台風19号の影響で、長野市も甚大な被害を被りました。新幹線も一部不通となる中での例年通りの学術集会の開催は、畑会長をはじめ関係者の皆様の大変なご苦勞のおかげとあらためて感謝申し上げます。被害を受けられた皆様に、謹んでお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復旧・復興をお祈り申し上げます。第46回学術集会の詳細については、本号のNewsletterで畑会長からの記事を参照していただけたらと思います。第47回学術集会は末永直樹会長のもと2020年10月9-10日に札幌市で開催予定です。

2. 功労会員制度設置(定款の変更)

会員の種別は正会員・準会員・名誉会員・賛助会員でしたが、新たに功労会員を設置することが2017年10月の理事会で承認され、2019年10月24日の社員総会で定款の変更が認められました。それに合わせて会員規則も変更され、承認されましたのでここにご報告します。それぞれの詳細については学会ホームページの[「会則について」](#)をご参照ください。

3. 日本肩の運動機能研究会

ここ数年議論を重ねてきた学術集会時に併設されている肩の運動機能研究会と本学会との関係について2019年10月24日の理事会、社員総会で決まりましたことをご報告します。このことについては、以前から“肩の運動機能研究会のあり方ワーキンググループ”で審議が進められていました。ワーキンググループでの審議および提案から、名称を「日本肩の運動機能研究会」に変更して、日本肩関節学会の傘下として活動していくこと、会員種別で準会員1号・2号を設定することが、2019年5月11日の臨時社員総会で承認されました。今回はそれらに伴う日本肩関節学会の会員規則の変更や委員会規則の変更が承認されました。詳細については学会ホームページの[「会則について」](#)の会員規則や委員会規則をご参照ください。

4. 国際学会

Newsletter 11号でもお知らせした通り、2019年は3年に1回開催されている国際肩肘関節学会(ICSES 今回は第14回)が9月にブエノスアイレスであり、参加してきました。今回の学会で初めて各国肩関節学会の理事長が一堂に会して、各国の現状や将来について語り合いました(写真1)。日本からは地球の反対側にあるアルゼンチンと遠い国にも関わらず40名以上の会員の先生が参加され、本学会のプレゼンスを示せたと思います。参加して下さった先



一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society

Newsletter

生方にあらためて感謝申し上げます。次回の第15回 ICSES は2022年5月17日-20日にローマで開催予定です。

また2019年10月にニューヨークで開催されたアメリカ肩肘関節学会 (ASES)2019 も日本が Guest Nation となっていたので、参加してきました。こちらは本学会の学術集会の1週間前という厳しい日程にも関わらず、13名の会員の先生が参加してくださり、熱い議論を交わすことができました(写真2)。ASESとは引き続き、密な関係を持っていきたいと思っていますので、厳しい日程のなか、参加して下さった先生には感謝申し上げます。次回のASESは2020年10月1日-4日の日程で開催される予定で、韓国が Guest Nation となっています。

2018年の第45回日本肩関節学会学術集会から会員連絡会が中止となっています。本学会からのお知らせは逐次 Web サイトで更新しておりますのでご覧頂ければ幸いです。

末筆になりましたが会員の皆様から学会に対する要望がありましたら事務局宛にお知らせください。



(写真1)



(写真2)

▶ 新代議員あいさつ

代議員 大泉尚美 (整形外科 北新病院 上肢人工関節・内視鏡センター)

このたび、日本肩関節学会代議員に選出していただきました整形外科 北新病院 上肢人工関節・内視鏡センターの大泉尚美と申します。

1992年に北海道大学医学部を卒業後、北海道大学整形外科学教室に入局しました。当時はまだ専門とする先生が少なく「肩はよくわからない、難しい」と敬遠されがちであった肩関節外科に興味を持ち、1996年の研修医時代に福田公孝先生のもとで肩の勉強を始めさせていただきました。その後は、現在までご指導いただいている末永直樹先生のもと北海道大学で肩関節の基礎および臨床研究を行い、2009年からは現職につき、肩関節診療や臨床研究に携わっております。2016年からは教育研修委員として、キャダバーワークショップや教育研修講演の講師を務めさせていただきました。

日本肩関節学会には1996年に入会し、初めての発表でいきなりパネルディスカッションに選んでいただいたのですが、壇上でほとんど何も話せず情けない思いをしたのが最初の思い出です。それから早くも20年以上が経ちますが、この学会は、ときに厳しい質問をいただくことで成長できる場であり、日々の診療でのモチベーションを保つ場であり続けています。今後は、これまで先輩方から授けていただいた知識と経験、そして肩関節外科の面白さを若い先生方に伝え、日本肩関節学会から世界へ発信する手助けをすることが役目だと思っています。また、今回私が理事会推薦という形で代議員に選出いただいたのは、女性代議員を増やしたいという理事会のご意向によるものです。女性の肩関節医も徐々に増えておりますが、学会員全体に占める割合はまだ低いのが現状です。今後さらに多くの女性肩関節医が活躍する場を広げられるよう務めたいと思います。

微力ではございますが、日本肩関節学会のさらなる発展のために尽力する所存でおりますので、今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

代議員 高橋憲正 (船橋整形外科病院 スポーツ医学・関節センター)

この度伝統ある日本肩関節学会の代議員に就任いたしました船橋整形外科の高橋憲正です。私は1995年に琉球大学を卒業後、千葉大学医学部整形外科学教室に入局し日本肩関節学会へは2000年に入会しました。大学在籍時には腱付着部症の除痛のメカニズムについて研究し、臨床面では肩関節外科、スポーツ整形外科について研鑽を積んでまいりました。2008年より現職場にて診療を行っています。当院では理学療法士に加えて看護師、放射線技師などと臨床研究をし、学術集会と肩の運動機能研究会で報告してまいりました。これまでの経験を活かし、医師、理学療法士のみならず肩にかかわる様々な医療スタッフが研究報告をできるよう活動していきたいと思ひます。また現職場に赴任後は多くの肩関節鏡視下手術を執刀するとともに若手医師の手術の指導を行ってきました。屍体肩を用いた鏡視下手術の講師も数多く経験しており、今後は若手医師の特に肩関節鏡手術の教育に尽力していきたいと考えております。船橋整形外科ではこれまで15か国を超える海外から研修の医師を受け入れてまいりました。アジア諸国においては肩関節外科の特に鏡視下手術はいまだ十分に発展しておらず、これらの分野に対する日本肩関節学会の役割は重要であると考えます。私は2015年に交換留学制度により韓国で1カ月間研修をさせていただきました。韓国における肩鏡視下手術のレベルの高さを実感しました。アジアにおいては日韓が協力し、肩関節外科の発展に努めていく任務があると考えます。現在、雑誌「肩関節」の査読委員、Journal Orthopaedic Scienceのeditorial board memberを務めており、今後は日本国内で発表されている優れた研究を海外へ報告することに微力ながら尽力できればと考えております。日本肩関節学会のますますの発展に寄与できるよう精進していく所存ですので、よろしくお願ひいたします。



代議員 田崎 篤 (聖路加国際病院 整形外科)

この度 2019 年度日本肩関節学会代議員に選出されました田崎でございます。長い歴史を持つ本学会に、更に貢献できる機会を頂き心より感謝を申し上げます。

私の肩関節外科臨床は、4つの経験を元に形成されていると感じています。一つ目は、2004年から1年間”Campbell's Operative Orthopaedics”を出版している Tennessee University-Campbell Clinic で過ごし、数多くの文献から信頼できる術式を選定して著述する作業に触れることができました。最新の知見に偏ることなく、古き良き保守的な手術手法も正確に後世に伝えていく大切さを学びました。2つ目は Johns Hopkins University での臨床研究で、肩関節の理学所見の正診性を検証する研究に関わりました。画像検査に偏重することなく、理学所見を正しく取り、その臨床的意義を正しく検証する大切さを体得しました。3つ目は東京医科歯科大学大学院臨床解剖学教室で解剖学を学び、正常形態を知ることこそが病態を評価する上で重要であることを学びました。そして4つ目は、ラグビー日本代表(五輪チーム)や複数のコリジョンスポーツの大学体育会部活動に参加してスポーツ現場に赴き、衝突性スポーツの肩外傷に診療に関わることで、情熱持って診療に当たってきたことが自らの成長につながったと感じています。

臨床研究を通じて患者に信頼される診断、診療方針を築き、臨床解剖学の知見を元に新しく安全な手術術式を考案し、画像診断法の精度を高めていくこと、そして肩関節衝突性スポーツ傷害の診療の発展に貢献していることが、微力ながらも私が本学会の未来に寄与できることと考えております。

更に情熱を持って、肩関節の診療に向かう所存でございます。引き続きご指導を給われますよう、何卒よろしくお願ひ致します。

代議員 田中誠人 (第二大阪警察病院 スポーツ医学センター)

この度、日本肩関節学会代議員として選出頂き、光栄に思うと同時に歴史ある学会の運営に携わることとなり身の引き締まる思いです。

ご推挙頂いた先生方にはこの場をお借りして深く御礼申し上げます。

私は 2008 年に肩関節専門医を志し、当会に入会を致しました。本学会の活動を通じて多くのご指導を賜り、肩関節外科医としての知見を広めさせていただいております。卒業年に対して入会が遅くなっておりませんが、入会前は大学院時代から卒業後のオーストラリア国立幹細胞研究所での留学期間まで、ES 細胞や間葉系幹細胞から軟骨組織再生を発生学的見地から再現するという基礎研究に従事しておりました。肩関節外科とは縁遠いようにも思われますが、基礎的、論理的に物事を検証していくことの重要性を学び、臨床の現場でもより良い医療の提供に役立っております。その後は大阪大学整形外科で菅本一臣教授の指導のもと、臨床とともに動作解析について深く学ばせていただきました。現在の大阪警察病院では林田賢治先生のご指導のもと、多くの肩関節疾患を診させていただくとともに年 150 例以上の手術を自ら執刀するという経験をさせていただいております。病院診療と並行して、スーパーラグビーサンウルブズのチームドクターとして帯同を経験し、また複数の大学や高校のラグビー強豪チームのチームドクターとして多くの肩外傷の診療やスポーツ傷害に関わり知見を重ねてまいりました。数多くの難題にも直面しましたが本学会を通じて賜ったご指導により、選手たちをプレー復帰に導くことができしております。

ご推挙頂いた先生方の期待に背かないように今後の努力精進に努めてまいりたいと思っております。また日本肩関節学会所属の先生方には今後とも倍旧のご指導ご鞭撻を賜りますよう何卒よろしくお願ひ申し上げます。

代議員 山本宣幸 (東北大学 整形外科)

さてこの度、私山本宣幸は東京大学整形外科田中栄先生および大阪医科大学整形外科三幡輝久先生に推薦人になっていただき、日本肩関節学会の代議員に就任させていただきました。

私は2001年に日本肩関節学会会員になってから、これまでに肩関節鏡手術のみならず臨床研究、基礎研究に励んでまいりました。特に肩関節脱臼に合併する骨欠損に関して興味をもち、井樋栄二先生の指導の下、生体力学的並びに臨床研究に力を入れてまいりました。国際学会で発表し、英文誌にも積極的に投稿してまいりました。このように活動できましたことに改めて深く感謝しております。今後は私自身が経験した手術手技や学術的知識を若い世代の先生にも還元できればと考えております。

これまでに日本肩関節学会の会員として学会の手術手技認定のあり方ワーキンググループ、学会のあり方ワーキンググループに携わり、また現在は学会の学術委員及び教育研修委員として活動させていただいております。歴史のある日本肩関節学会が更に発展し、世界の肩関節外科をリードしていけるように微力ながら貢献できればと思っております。今後も日本肩関節学会の一員として学会の運営や発展に少しでも貢献できればと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

最後に代議員選挙にあたりまして東北大学整形外科井樋栄二先生をはじめとする多くの先生方に多大なる支援をいただきました。ここに感謝の意を申し上げます。

▶ 第46回日本肩関節学会学術集会を終えて

第46回日本肩関節学会学術集会 会長 畑 幸彦

(JA長野厚生連 北アルプス医療センターあづみ病院 統括院長)



この度、2019年10月25日(金)、26日(土)に第46回日本肩関節学会・学術集会を長野市にありますホテル国際21とTHE SAIHOKUKAN HOTELにおいて開催させていただきました。このような歴史と伝統のある本学会を長野県で初めて(中部地区では25年ぶり2回目)主催させていただくことになり、大変光栄に思っております。開催に際しましては、格別のご支援を賜り誠にありがとうございました。

皆様のお力添えのもと、お蔭様をもちまして多数の皆様のご参加をいただき、盛会のうちに終えることができました。これ

もひとえに先生方のご指導とご協力の賜物と、心より感謝しております。

今年は台風19号により長野県の各地も被災し、交通網の回復が不十分な状態にもかかわらず1,590名の皆様にご参加いただき、さらに募金にもご協力いただき、本学術集会開催は被災地復興の一助になったと思います。

今回の学術集会は「継往開来(けいおうかいらい)」をテーマにさせていただきました。「継往開来」とは、先人の事業を受け継ぎ、発展させながら未来を切り開くという意味です。これを踏まえて、一般口演やポスタープレゼンテーションに加えて、日本肩関節学会では2つのパネルディスカッションと5つの主題を、肩の運動機能研究会はシンポジウムとCombined Sessionと3つの主題を用意させていただきました。どのセッションにおいても活発な議論を展開していただき本当にありがとうございました。また投球動作のバイオメカニクスでは世界的権威者のDr. Glenn S. Fleisigの特別講演や平昌オリンピック・スピードスケート女子団体パシュート金メダリスト 菊地彩花さんによる文化講演を企画いたしました。楽しんでいただけましたでしょうか。

信州長野には都会のような利便さはありませんが、その分、豊かな自然に囲まれた信州ならではの“おもてなしの心”を持って本学術集會を運営させていただきました。運営にあたりましては行き届かないところも多かったことと思いますが、どうかご容赦くださいませ、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

末筆ではございますが、皆様方のより一層のご活躍とご健康をお祈り申し上げます。



▶ 第47回日本肩関節学会学術集會会長あいさつ

第47回日本肩関節学会学術集會 会長 末永直樹

(整形外科 北新病院 上肢人工関節・内視鏡センター センター長)



この度、第47回日本肩関節学会学術集會を2020年10月9日(金)・10日(土)にホテルエミシア札幌および新さっぽろアークシティホテル(札幌市)にて開催させていただくこととなりました。

本学会では“反省と革新 世界へ発信する!”をテーマとして、オリジナリティーのあるアイデア、研究を世界に発信するために従来と趣を変え、権威ある英文雑誌に投稿できるような調査手法の発表を期待し、主題を“10年以上の長期成績”、“多施設研究”、“Prospective randomized control study”などとしました。さらに10名以上の海外の先生方を迎え、国際シンポジウム、共催セミナー及びワークショップを予定しています。また従来どおり、第17回日本肩の運動機能研究会を

“Evidence Based Rehabilitation”をテーマに併設研究会として行います。

昨今、研究する環境は厳しさを増しています。先生は貴重な時間を割いて何故研究していますか? 病院、大学の経費で各地へ学会旅行したいから? 先輩になにか出せと言われたから? 業績が必要だから? 学会で発表して目立って名前を売りたいから? ではないと思います。研究結果がネガティブなものでも、ほんの少しだけでも、今すぐにはなくても臨床の患者さんの治療に役立つことを期待されているからではないでしょうか? せっかく大変忙しいなか時間を費やし、家族と過ごす時間を削ってまで研究した結果が、多くの人に伝わり波及して欲しいと考えています。今回の肩関節学会ではそんな頑張った先生の世界に発信する発表を募集します。

10月の札幌は鮭の遡上に伴い生イクラやししゃもなどの海の幸や落葉きのこなどの山の幸、冬に向けて栄養を蓄えるエゾシカ等のジビエ料理など食の秋を楽しむこともできます。また札幌中心部から車で30分から1時間程度の近郊には、朝里川温泉や定山溪温泉、支笏湖温泉などがあり、紅葉を見ながら巡ることも可能です。

学会開催場所である新札幌は千歳空港から28分(JR)、札幌駅からは8分(JR)、札幌の中心である大通りからは19分(地下鉄)と、札幌市内のみならず道内観光地へもスムーズにアクセスできる場所です。是非ともご家族連れでご参加いただき、秋の北海道を満喫していただけることを祈っております。

多くのご参加を心からお待ちしております。

▶ 第 48・49 回日本肩関節学会学術集会のお知らせ

第 48 回日本肩関節学会

学術集会会長：岩堀裕介（医療法人三仁会 あさひ病院 スポーツ医学・関節センター センター長）

開催日時：2021年10月29日（金）～30日（土）（予定）

開催場所：ウインクあいち

第 49 回日本肩関節学会

学術集会会長：高瀬勝己（東京医科大学 整形外科学分野 運動機能再建外科学寄附講座 教授）

開催日時：2022年10月（予定）

開催場所：東京都（予定）

▶ 日本肩の運動機能研究会の発足について

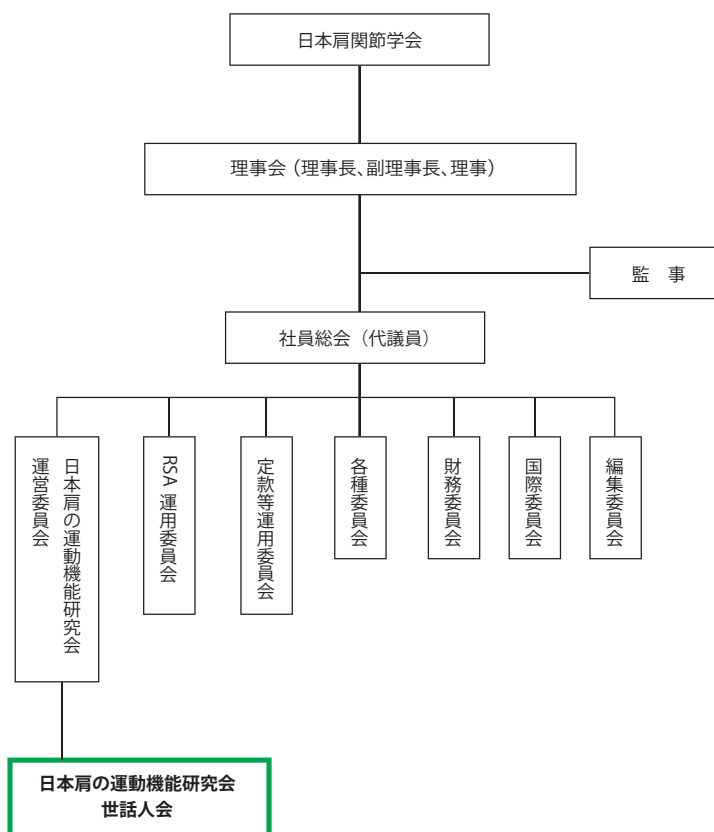
日本肩の運動機能研究会 代表世話人 村木孝行

この度、日本肩の運動機能研究会を運営する世話人会の代表世話人を拝命いたしました理学療法士の村木孝行と申します。これまで日本肩関節学会で併催されてきた肩の運動機能研究会は2019年10月をもって「日本肩の運動機能研究会」と名称が変更され、日本肩関節学会内の組織として承認されました。

この会は医師以外の肩関節診療に携わる関連職種の議論の場として、2003年の第30回日本肩関節学会開催時に会長の高岸憲二先生のご厚意により肩フォーラムが設けられたのが始まりです。その翌年の第31回日本肩関節学会（筒井廣明会長）で第1回目の肩の運動機能研究会（以下研究会）が併催されて以来、毎年開催されるようになり、2019年で第16回を迎えました。第1回開催時には100名程度の参加者でしたが、その後参加人数が飛躍的に増加し、ここ数年では1,000名を超える参加人数となりました。この人数は米国や欧州の肩肘セラピスト学会の参加者と比べてみても10倍近くの参加人数になります。

このように多くの方が参加され、様々な意見や要望が聞かれるようになりました。最も多かったのは、研究会で発表された内容が医学論文情報データベースなどに記録として残せないか、ということでした。データベースに登録するには事務局を置いている組織が申請する必要があります。また、運営側においても参加者の大半は日本肩関節学会の会員でないため、各種案内や座長・シンポジストの選定などに難渋するという問題点を毎年抱えておりました。そこで日本肩関節学会のご厚意で「肩の運動機能研究会あり方ワーキンググループ」が立ち上がり、多くの議論や検討を経て、今回の発足に至りました。

今回の組織化により、2020年度の研究会での一般演題はすべて会員による発表となります。それに付随して、2020年度以降の発表演題に関しては、抄録本文を除く演題情報がデータベースに掲載される予定です。2020年はこのような移行期間となりますので、当世話会は円滑に移行できるよう、組織の地盤を固めながら活動してまいります。そして将来的には、研究会をより大きなパワーを持った会に発展させ、国内外の肩関節障害に悩む患者さんに有益な会になることを目標として尽力してまいります。会員の皆様のご理解とご協力のほど何卒よろしくお願い申し上げます。



▶ 各委員会報告

雑誌「肩関節」編集委員会

委員長 佐野博高

編集委員会では、今井晋二担当理事・中川照彦アドバイザーの指導の下、内山善康・鈴木一秀両副委員長と25名の委員という体制で、雑誌「肩関節」編集に当たっています。2019年11月13日には、無事第43巻の全論文のWEB公開が終了しましたので、会員の皆様におかれましては是非ご活用いただければ幸いです。

本年度は、経過観察期間が非常に短い投稿論文が散見されました。当委員会としては、提示された臨床成績の信頼性を担保していくには、原則として1年以上の経過観察が必要であると考えています。しかし、長期にわたる経過観察が不要な研究もあることから、投稿規定には「臨床研究は原則として1年以上の経過観察期間とします。ただし、骨折治癒や新しい手術法の術後短期成績、術中合併症に関する報告などについては、1年未満の経過観察でも編集委員会の判断で掲載を認めることがあります。その場合は、論文中で経過観察期間が1年未満にとどまった理由、問題点などを十分考察してください。」と記載しています。論文をご準備される際には、この点について十分ご留意くださいますようお願いいたします。

雑誌「肩関節」第1号については、元々当該年度の抄録集に割り当てられていました。しかし、2010年の第34巻からは抄録集の収載を中止したため、以後現在に至るまで、10年に亘って第1号が欠落した状態が続いていました。今回、この問題について理事会でご審議いただき、第44巻からは査読を経て採用された論文を第1号から掲載していくことが正式に認められました。

最後に、当委員会では、投稿者の利便性を高めるために、投稿規定やチェック表を随時改訂しています。論文を執筆される際は、日本肩関節学会のweb site (<http://www.j-shoulder-s.jp/entryrule/index.html>) で、最新の情報を十分ご確認くださいますようお願いいたします。



国際委員会

委員長 三幡輝久

10月23日から11月7日まで SECEC Traveling Fellow2名 (Dr. Sumrein Bakir Omar, Dr. Paolo Consigliere) が訪日されました。Traveling Fellow のお世話をくださった肩学会の先生には深く感謝を申し上げます。

10月24日の国際委員会において2020年9月からの SECEC Traveling Fellow の選考を行いました。4人の先生が立候補されておりましたが、東北海道病院の大野洋平先生が選考されました。大野先生には韓国からの Traveling Fellow と共にヨーロッパの著名な先生の施設を訪問していただきます。

2020年10月の ASES Traveling Fellow を2020年3月31日まで募集しております。貴重な経験になることは間違いありませんので奮ってご応募ください。

高岸直人賞決定委員会

委員長 船越忠直

2019年10月24日開催の委員会において、第46回日本肩関節学会学術集会で採択され選考基準を満たした演題の代議員査読評価の集計結果を検討し、高岸直人賞候補演題を決定しました。今後、対象者に論文提出を求め、委員会審議を経て第33回高岸直人賞(基礎論文、臨床論文各1編)を決定します。受賞者は、第47回日本肩関節学会学術集会において表彰されます。また、第46回日本肩関節学会学術集会で採択された演題の代議員査読評価の集計を検討し、Best Abstract の選考を行いました。対象抄録は Journal of Shoulder and Elbow Surgery 誌に掲載される予定です。

高岸直人賞の対象論文は下記の如くです。

1. 当該年度の12月31日時点で満45歳以下の会員の発表論文であること、
2. 候補論文は当該年度の日本肩関節学会での発表論文であること、
3. 対象論文は Update で魅力的で素晴らしい論文であること、
4. 高岸直人賞の審査対象論文は肩関節学会抄録集から選ばれてノミネートされた論文の中から、Full paper か期限内に提出された論文とする、
5. 審査の対象となる論文は日本文、英文のいずれでも可とする、
6. 上記の条件が満たされた論文は雑誌「肩関節」、JSES 以外の雑誌に投稿しても可とする、
7. 審査対象はノミネートされた論文の Full paper ですすでに Publish されたものは含まない

高岸直人賞、Best Abstract の論文選定にご協力をいただいた、すべての先生に心からお礼を申し上げて、委員会報告と致します。

社会保険等委員会報告

委員長 望月智之

8月6日に橋口理事とともに厚労省のヒアリングを受け、上腕二頭筋長頭腱損傷・障害に対する術式として、観血的手術では「腱固定術(肩)」「肩腱板断裂手術(腱固定術を伴う)」、鏡視下手術では「腱固定術(肩)(関節鏡下)」「肩腱板断裂手術(関節鏡下)(腱固定術を伴う)」の計4術式に対して保険収載の要望を行いました。アンケートによる実態調査に基づき、その必要性和妥当性を担当者に誠意をもって説明致しました。

10月24日の社会保険等委員会においては、2022年の診療報酬改定に向けた新規術式の話し合いを行い、肩鎖関節脱臼に対する「鏡視下靭帯形成術」と拘縮を伴う腱板断裂に対する「鏡視下腱板修復術+関節授動術」をその候補と致しました。引き続き新規術式案を審議していきますので、代議員の先生方からのご意見、ご要望を頂きたく存じます。また外保連の新委員として検査担当を黒川大介先生、処置担当を菊川憲志先生に御就任頂くこととなりました。

実態調査である手術アンケートは、外保連や中医協に対して新たな手術手技の申請・要望を行う上で、大変重要な資料となります。次回の手術アンケートは2022年に行う予定となっております。お手数をお掛けしますが、その際には会員の先生方にご協力を戴ければ幸いに存じます。

教育研修委員会

委員長 後藤英之

今年度の教育研修委員会の活動について報告致します。

まず、第4回キャグバーワークショップを9月6日(金)、7日(土)の2日間、名古屋市立大学先端医療技術イノベーションセンターにて開催しました。

参加人数は関節鏡コース4名、切開手術人工関節コース8名の合計12名で、関節鏡や人工関節を用いての実際の手術手技の実習を行いました。また、9月26日(金)18時30分から第4回肩関節疾患手術手技フォーラムを名古屋市立大学会議室(JPタワー名古屋5階)にて開催しました。

第4回キャグバーワークショップ・肩関節疾患手術手技フォーラム

講師

大泉尚美先生(北新病院 上肢人工関節・内視鏡センター)

国分 毅先生(新須磨病院 整形外科)

小林尚史先生(KKR 北陸病院 整形外科)

酒井忠博先生(トヨタ記念病院 整形外科)

末永直樹先生(北新病院 上肢人工関節・内視鏡センター) (五十音順)

本会の開催に当たっては、運営事務局のNPO法人 メリ・ジャパンをはじめ関係各位の皆様の多大なご協力、協賛を頂きました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。参加者からは、有意義であったとご好評をいただきましたが、運営面では改善が必要であり、皆様のご意見を賜りながら、より良いワークショップとなるよう務めたいと思います。また、第11回教育研修会を第46回日本肩関節学会開催期間中に開催しました。早朝開催にも関わらず多くの皆様のご参加を賜り誠にありがとうございました。



2019年10月26日(土) 第2会場

教育研修講演1: 7:00-8:00

座長: 後藤英之先生(至学館大学健康科学部)

・肩のスポーツ障害の診断と治療

講師: 船越忠直先生(慶友整形外科病院 整形外科)

・肩のリハビリテーション

講師: 小林尚史先生(KKR 北陸病院 整形外科)

教育研修講演2: 8:00-9:00

座長: 相澤利武先生(いわき市立総合磐城共立病院 整形外科)

・肩関節周囲骨折の診断と治療

講師: 大泉尚美先生(北新病院 上肢人工関節・内視鏡センター)

・肩関節周囲の神経障害(胸郭出口症候群を含む)

講師: 末永直樹先生(北新病院 上肢人工関節・内視鏡センター)

教育研修講演では、朝7時、8時からの早い開催にもかかわらず、約200名の会場に立ち見が出るほど多くの方に聴講いただきました。

今後も委員会としては、研修会やワークショップを通じて会員の皆様の肩関節診療のお役に立てるよう活動して参りますので、今後ともご指導、ご意見を頂けますようお願い致します。

学術委員会

担当理事 高瀬勝己

学術委員会は担当理事が高瀬、委員は乾、後藤(昌史)、小林、塩崎、田中(栄)、畑、浜田、林田、藤井、森原、山本の各先生11人で活動しておりますが、委員長であった森澤(豊)先生が監事になりましたので1名減となっております。

2019年の活動では、以前に学術委員から学会員の先生方をお願いしたアンケート結果を英語論文として国際雑誌に投稿し、先生方の今後の研究の一助となることを目標としております。

浜田純一郎先生が責任者となり凍結肩に関する定義あるいは考え方のアンケート調査はTitle: Representative survey of frozen shoulder questionnaire responses from the Japan Shoulder Society: What are the appropriate diagnostic terms for primary idiopathic frozen shoulder, stiff shoulder or frozen shoulder?としてJournal of Orthopaedic Science; 2019, 24(4):631-635. doi: 10.1016/j.jos.2018.12.012.に採用されました。

高瀬勝己が責任者となり肩関節脱臼に関するアンケート結果調査では、診断編をTitle: Methods used to assess the severity of acromioclavicular joint separations in Japan: A surveyとしてJournal of Shoulder and Elbow Surgeryに投稿中です。また、肩鎖関節脱臼に対する重症度分類を中心に治療方法に関する先生方の考え方を治療編として論文作成中です。

現在進行中の検討は、山本宣幸先生が責任者となり肩関節初回前方脱臼に対する外転外旋固定法の有用性に関する他施設共同研究を行っております。2020年は新たなテーマに対する検討を行う予定ですので、今後とも学会員の先生方にはご協力のほどよろしくお願いいたします。



広報委員会

委員長 北村歳男

広報委員会は日本肩関節学会の最新情報や各委員会の活動を日本肩関節学会会員と一般の皆様にお知らせすることを職務としています。日本肩関節学会ホームページに Newsletter として年に2回、夏号(6月)と冬号(1月)として発行しています。冬号は夏号と比べ内容が多く、今回の13号は西中直也先生と国分毅先生が編集責任者となり作成されています。理事長を始め、次回学会会長や各委員会に執筆を依頼し、執筆内容について全員で校正を行っています。前月号より韓国や欧州のフェローが日本国内の複数の病院を見学された感想も書いていただくようにしています。この感想は日本国内向けの情報とするに留めず、参加されたそれぞれの国の先生にも確認していただけるように韓国語や英語で書いていただき、一方韓国語は日本語に翻訳して日本国内向けに対処することで、ホスト国と参加国との情報交換の一役になれば幸いと考えています。

担当理事は望月由、委員は新井隆三、石田康行、大前博路、菊川憲志、北村歳男(委員長)、国分毅、小林勉、夏恒治、西中直也、松浦恒明、村成幸(五十音順:敬称略)で活動しています。

財務委員会

委員長 中川滋人

2019年5月に林田賢治前委員長から委員長職を引き継がせて頂いた中川滋人です。まず、最初に本年10月24日に行われた2019年度定時社員総会にて2018年度会計報告(2018年8月1日～2019年7月31日)および2019年度予算案(2019年8月1日～2020年7月31日)をご承認いただきました。予算作成にあたりご協力いただいた各委員会の委員長および税理士の柄澤徹先生に深謝いたします。幸い2018年度も昨年に引き続き黒字収支で終わることができましたが、2019年度は赤字となる予定です。これには一般会計と異なる特別会計の高岸直人賞口座からの借入金返済(毎年158万円ほど)が2020年度まで続くことが大きく影響しておりますので、2021年度以降には収支が改善するものと考えています。これまで賛助会員の新規加入やアカデミックサポートからの助成金などの増収策に取り組んできましたが、昨今の情勢からなかなか思うに任せないのが実情です。また、2020年度には日本肩の運動機能研究会が継続的な研究会として立ち上がる予定ですが、この研究会発足の際に発生する支出・収入についても予測が立たない状況です。学会主導の学術企画などに積極的に予算をつけていくためには、削減が可能な経費は極力減らしていく必要があります。すでにメールで可能な連絡事項は郵送を中止していますが、理事会や各委員会の会議についても必要性の少ない対面会議は極力Web会議に切り替えていただきたいと思っております。さらに賛助会員についても、ホームページからの広告が可能となっており、病院単位で会員になっていただいている例もありますので、先生方が所属されている病院や出入りされている関係業者の皆様にお声掛けいただければ幸いです。皆様にはご迷惑をおかけしますが、財務健全化に向け今後ともご協力お願い申し上げます。

倫理・利益相反委員会報告

委員長 名越 充

2018年度における本委員会の活動としては、本学会学術委員会により行われた「肩鎖関節脱臼に対するアンケート調査」の結果に関する英語論文の投稿に必要な倫理審査を行い、承認通知証の発行を行いました。また、日本医学会における利益相反(COI)自己申告書が過去3年間を申告する体裁となっていることを受けて、本学会のCOI自己申告書も日本医学会の様式に沿って、過去1年間から過去3年間へと変更を行いました。本学会役員お



よび関係者すべてに2016年から2018年の3年間におけるCOIに関して自己申告書を提出していただきました。

2018年4月1日に産学連携臨床研究における透明性確保のための臨床研究法が施行されました。臨床研究における適正実施の重要性が示されており、厚労省ホームページでの閲覧も可能です。公的研究費や臨床研究を実施する場合には、COIマネジメントを実施することが義務付けられています。学会員の先生方も産学連携の臨床研究を開始される際にはCOIを念頭に置いた取り組みを行ってください。

健常者を対象または対照群とする研究、薬剤・手術インプラントなどの適応外使用が含まれる研究では、十分な倫理審査が必要になりますが、倫理審査が実施されていない研究が時に見受けられます。倫理委員会がない施設や倫理面で疑問がある場合には、本委員会にご相談いただければ審議させていただきます。学会事務局までご連絡ください。

定款等運用委員会

委員長 西中直也

本委員会で審議し、2019年10月24日の社員総会で承認された事項を報告致します。

修正内容の詳細はホームページでご確認ください。

1. 功労会員設置について

本件は、2017年10月の理事会で承認、2019年5月11日臨時社員総会で報告されております。本委員会では、関連規則について審議を行いました。功労会員設置により定款の定める会員種別は、(1) 正会員、(2) 準会員、(3) 名誉会員、(4) 功労会員、(5) 賛助会員、(6) 通信会員となります。関連して以下の条項が改定されました。

定 款：第3章 会員 第5条 種別

会員規則：第2条 会員の種別及び資格要件

：第4条 権利義務

会費規則：第3条 会費

2. 日本肩の運動機能研究会発足に伴う準会員の区分変更について

肩の運動機能研究会は、日本肩の運動機能研究会（以下、研究会）として、一般社団法人日本肩関節学会に包括されます。これに伴い準会員1号、準会員2号を設置するため、以下の条項が改定されました。

会員規則：第2条 会員の種別及び資格要件

：第3条 入会手続

：第4条 権利義務

会費規則：第3条 会費

今後、日本肩の運動機能研究会運用委員会と協議しながら

日本肩の運動機能研究会会則

日本肩の運動機能研究会運用委員会規則

を、策定します。理事会に諮り、2020年5月の臨時社員総会で審議いただきます。

日本肩の運動機能研究会が一般社団法人日本肩関節学会に包括されることは非常に大きな変革だと思います。発足後、円滑に問題なく機能せしめるべく多くの審議すべき事項があります。まさに、当委員会の力を存分に発揮することが必要と思われます。今後も、委員の先生方のお力添えのもと本委員会がしっかり機能していくように努力していきます。どうぞよろしくお願い致します。

リバーズ型人工肩関節運用委員会

委員長 山門浩太郎

日本整形外科学会インプラント委員会で作成中のリバーズ型人工肩関節（RSA）ガイドラインですが、おそらく、骨折治療を主として担う外傷外科医によるリバーズ型人工肩関節の使用が開始される見込みであり、外傷外科医の資格管理は骨折治療学会の主管する業務となることとなる公算が高いと思われます。しかしながら、RSA 使用にかかわるガイドラインの厳格性については基本的に大きく変化することはありません。今後も、ガイドラインを遵守いただけますようお願い申し上げます。

また、懸案となっておりました症例登録率ですが、メーカーの実販売数との照合では、2015年の登録率は88.2%となるなど、日本人工関節学会からの年次報告の結果よりも優れた結果となっておりました。これは、日本人工関節学会の集計報告後にも過去にさかのぼって症例登録が行われているためと考えられます。しかし、2020年4月から日本整形外科学会症例レジストリー（JOANR）が開始された後には、症例登録期間に締め切りが設定されることから、執刀後すみやかな登録が必須となります。JOANRは臨床研修の実績のみならず専門医維持にも使用される可能性が高いこともあり、これまで以上のすみやかな症例登録をお願いいたします。

2019年には、新たに1社の日本市場参入がおこなわれ、日本におけるRSAの普及は順調に拡大しています。今後も、本邦導入において示された高い安全性を毀損することなく、この優れた手術術式が行われていくよう皆様のご協力をお願いいたします。

また本委員会では、リバーズ症例の術式に悩まれている先生方の相談窓口を設けております。相談ご希望の場合は、症例の詳細（PowerPoint）と先生がお考え中の術式を御記載の上、事務局を通じて委員会までお送りください。

日本肩の運動機能研究会運営委員会

委員長 浜田純一郎

1. 日本肩の運動機能研究会の位置付け

10月の社員総会で肩の運動機能研究会が「日本肩の運動機能研究会」（以下研究会）という名称になり、日本肩関節学会（以下肩関節学会）内の組織として承認されました。それに伴い肩の運動機能研究会のあり方WGの名称は「日本肩の運動機能研究会運営委員会」（以下運営委員会）に変更しました。その構成メンバーは、これまで通り担当理事：岩堀裕介、委員長：浜田純一郎、委員：甲斐義浩・菊川和彦・黒川大介・小林尚史・高村隆・田中稔・立花孝・村木孝行・森原徹・山口光圀（五十音順）、アドバイザー：中川照彦（敬称略）です。組織図として、肩関節学会にある13の委員会の一つである運営委員会の下に研究会が位置します。したがって、肩関節学会と研究会が併設するのではなく、肩関節学会内の一組織として研究会が存在します。

2. 会員制度の変更

肩関節学会の会員は医師である正会員と非医師である準会員でしたが、社員総会ではこれまでの準会員を準会員1号とし、新たに準会員2号を新設しました。準会員1号の年会費や権利は従来の準会員のままとし、準会員2号の場合、年会費5,000円、研究会のみ発表可能、肩関節学会の聴講可能、雑誌「肩関節」の購



読可能・投稿不可、研究会の抄録郵送ありとなります。準会員1号との相違は表をご覧ください。従来の準会員の先生方は原則そのまま準会員1号に移行していただきます。入会時に必要な正会員の推薦人は従来1名でしたが、今後は2名となります。また、準会員1号でありかつ肩関節学会で発表した演題のみを雑誌「肩関節」に投稿できます。準会員1号でも研究会に発表した演題は雑誌「肩関節」に投稿できませんのでご注意ください。

3. 研究会世話人の選出

研究会の世話人として以下の方々が承認されました。代表世話人に村木孝行、副代表世話人は高濱照、立花孝、世話人として甲斐義浩、高村隆、千葉慎一、三浦雄一郎、宮下浩二、山崎肇、遊佐隆（敬称略）の7名が選出されました。

4. 今後研究会の発表者・共同演者は会員でなくてはならない

2020年度の研究会で発表する場合、発表者および共同演者は準会員でなくてはなりません。したがって、演題募集時までに準会員1号または2号に入会して頂くようお願いいたします。

5. 会員募集の開始と手続き

日本肩関節学会ホームページ上で2020年1月から準会員1号および2号の募集を開始する予定でありますので、準会員の入会手続きをよろしく願いいたします。その際、肩関節学会の正会員2名の推薦が必要となります。すでに準会員の方は準会員1号に移行しますので入会・変更手続きは不要です。

	入会	入会金	年会費	肩関節学会	研究会	雑誌肩関節	JSES	抄録郵送
準会員1号	正会員2名の推薦	5,000円	15,000円	発表可	発表可	投稿可*・購読可	購読可	郵送あり
準会員2号	正会員2名の推薦	5,000円	5,000円	聴講可	発表可	投稿不可・購読可	購読不可	郵送あり

JSES: Journal of Shoulder and Elbow Surgery. * 準会員1号が肩関節学会で発表した演題のみ雑誌「肩関節」への投稿可能



選挙管理委員会

委員長 森原 徹

1. 代議員選挙

選挙結果

2019年10月24日施行の代議員選挙の結果、下記の代議員を選任した。

(代議員選挙公示は、2019年度の事業で公示済み)

●代議員選出規則第4条2 推薦基準 (1)～(3) 該当者 (選任4名・五十音順)

高橋憲正、田崎篤、田中誠人、山本宣幸

総投票数60票、有効票60票、無効投票0票

最高得票数は53票、最低当選得票数は26票であった。

*代議員立候補者13名に対し、1回目に信任投票を行い、議決権を持つ

出席代議員60名から、8名が2/3以上の信任投票を獲得した。

公募数が4名のため、8名に対し選任投票を行った結果である。

●代議員選出規則第4条2 推薦基準 (4) 該当者

大泉尚美

出席代議員の3分の2以上の信任を得た。

2. 学術集會会長選挙

選挙結果

2019年10月24日施行の学術集會会長選挙の結果、下記のとおり決した。

(学術集會会長選挙公示は、2019年度の事業で公示済み)

第49回日本肩関節学会学術集長 正会員 高瀬勝己

(総投票総数57票、有効投票数57票、信任34票)

【2019年度 活動計画】(会期：2019年8月1日～2020年7月31日)

1. 理事選挙公告公示 (2020年4月頃公示・選挙は2020年度)

2. 2020年度代議員選挙公示 (2020年6月公示・選挙は2020年度)

3. 第50回学術集會会長選挙 (2020年6月公示・選挙は2020年度)

▶ SECEC Traveling Fellow 日本滞在記

Paolo Consigliere, MD

Paolo Consigliere MD, Consultant, Royal Berkshire Hospital NHS FT, U.K.



Thank you for asking me to send my feedbacks regarding the 2019 JSS-SECEC travelling fellowship. It will be my pleasure to report about this great experience and I hope my words will encourage other surgeons to apply for future fellowships.

First of all, thank you to the formal president of JSS Prof H. Ikegami, to all the Board Members and to all the colleagues whom have given me the opportunity to learn, discuss and share experiences and thoughts related to the orthopaedic world but not only. Thank you for inviting me as a guest speaker to the 46th JSS annual meeting and for all the support given while travelling around Japan.

My journey in Japan started on the 23rd of October 2019 and ended on the 7th of November when I moved to Seoul, Korea. When I landed in Tokyo, first stop, I received a warm welcome by the secretary of the JSS, Ms Noriko Kawamura whom have put lots of efforts in planning and organizing the whole trip. The organization was outstanding!

I travelled with my colleague, and now friend, Dr. Bakir Omar Sumrein whom has been the best travel mate I could ask for. This is an additional positive point of the fellowship: you spend long days with a stranger whom gradually become one of your closest friends. We had great fun together visiting all the different centres and hospitals and we also shared the moments while doing some sightseen together (like waking up at 5:00am to visit the fish market in Tokyo and have sashimi for breakfast at 6:30am, going to find the snow monkeys in the mountains around Nagano or going out with Prof. Shibata's team, in Fukuoka, late at night). We also definitely had time to discuss about complex cases and the different ways we approach shoulder pathologies in our countries, UK and Finland.

During our 15 days stay we moved from Tokyo to Nagano, then Sendai, Tokyo again, Fukuoka, Nagoya and Osaka.

In Nagoya we presented at the 46th JSS annual meeting. I presented my ongoing study on metaphyseal reverse total shoulder arthroplasty: 5 to 11 years follow up, clinical and radiological results. I was happy to see that the talk encouraged interest and hence I was asked numerous questions about technical details of the implant, surgical indications and postoperative rehabilitation regime. We were invited to the presidential dinner and the welcome cocktail and I had the chance to start meeting the professors whom would have host us in the following days. Unfortunately, the presentation at the meeting are mainly given in Japanese so it was difficult for us to follow and understand the nice presentations given there.

In Sendai, we were host by Prof. Itoi. Unfortunately, it was a very short stay and we only managed to be in theatre



one morning observing two double-row rotator cuff repairs. However, they organized an afternoon where we could present our projects to the local team and Prof. Itoi's team presented their most recent studies. We had a great constructive discussion about the management of first-time shoulder instability, on-track and off-track lesions and biological aspects of rotator cuff tendon healing. A special thanks to Prof. Yamamoto who guided us from Nagano to Sendai and treated us like kings. If you go to Sendai you must try the beef tong.

In Tokyo, we had a great day with Prof. Sugaya. We were invited at the morning meeting and had the possibility to choose between 19 surgeries to observe in just one day! We had good discussions about shoulder instability, rotator interval closure, acute bony bankart repair and superior capsular reconstruction (SCR). The evening we couldn't enjoy the legendary Prof. Sugaya's team night out as we went straight back to Tokyo city centre to enjoy the best sushi dinner of all time with Prof. Takase, Prof. Ikegami and Prof. Nakagawa.

The following day we visited Prof. Nishinaka and saw the Mt Fuji from the rooftop of the hospital.

In Fukuoka, we had great time with Prof. Shibata and Prof. Izaki's team. We spent time in the operating theatre and had time to enjoy Fukuoka which has got a very nice city centre and is a great city to visit and to be walked around.

In Nagoya, we were lucky enough to watch the Rugby world cup final (not so great the final result) in the restaurant owned by the captain of the Japanese female rugby team and discuss about SLAP lesions and rehabilitation protocols in shoulder micro-instability tasting single malt Japanese whisky with Prof. Goto and Prof. Sugimoto. We attended Prof. Sugimoto's sport clinic and operating theatre, realizing that he is very skillful with ultrasound and a very experienced surgeon in treating shoulder pathologies in throwing athletes. A big thank you to Prof. Goto whom drove us around Nagoya area on a Sunday and organized for us great dinners with his team.

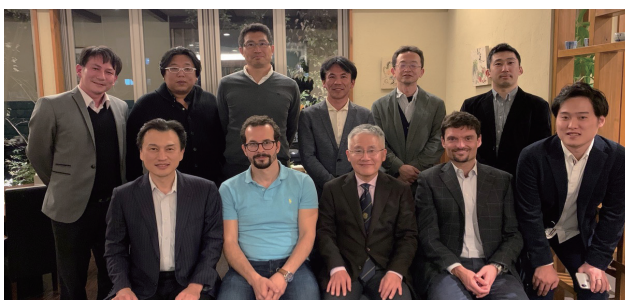
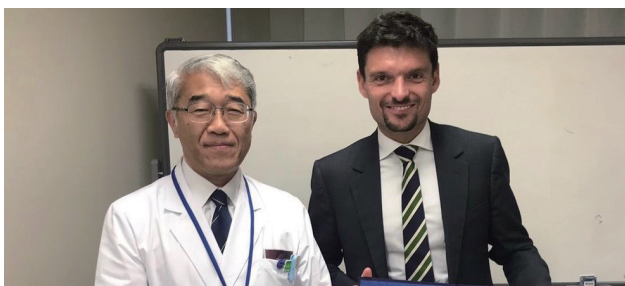
On the 4th of November, due to the national holiday day (culture day) and no working related activities planned, we could spend a day in Kyoto and enjoy some Japanese culture.

In our last stop in Osaka, we spend time with Prof. Mihata and tried to grasp all the secrets about SCR. We had a great day in theatre with two SCR planned for the day and a nice morning in outpatient clinic where we could discuss about indications and different treatment options for shoulder injuries.

It is obviously impossible to share the variety of experiences that we had in these two intense weeks but I hope I gave you an idea of what this fellowship is about. It is about meeting a culture, spending time with great, honest and generous people and yes, also learning about trauma and orthopaedics.

Sincerely,

Paolo Consigliere



Bakir O. Sumrein, MD

Consultant, Tampere University Hospital, Finland.



Thank you for hosting me for the 2019 JSS-SECEC travelling fellowship. I would like to express my gratitude to the president of JSS Prof H. Ikegami, all the Board Members and colleagues whom went out of their way to make this a once in a life time experience both academically and socially. It was a privilege to present the NITEP study results in the 46th JSS annual meeting.

During my two weeks stay in Japan, I had the opportunity to travel through multiple orthopaedic centres and clinics around the country, meet distinguished colleagues, learn and make friends in a hospitable environment.

On the 23rd of October 2019 I arrived at Haneda airport after a long flight, there I met dr Paolo Consigliere the fellow from UK whom I now dare to call my friend. Ms Noriko Kawamura met us in the airport and made sure we had all we needed throughout our travel in Japan. We spend the night in Tokyo, and the next morning we had an early morning sashimi breakfast. In the afternoon we took the Shinkansen to Nagano which was punctually



on time in spite of the recent typhoon Hagibis. In Nagano we attended the presidential dinner of the 46th JSS annual meeting, It was a great privilege to present the results of the NITEP study: Operative versus non-operative treatment for 2-part proximal humerus fracture: A multicentre randomized controlled trial (www.nitep.eu) in the meeting the following day and listen to my friend dr Paolo Consigliere present his study. We had a chance to look around the city and visit the Zenkō-ji temple. Prof Yamamoto took us to dine in an izakaya, which was a nice experience.

On the 27th we continued to Sendai with Prof. Yamamoto who kindly showed us around and made us feel like home. We had the famous sendai beef tongue for lunch and at dinner time we got introduced to Prof Itoi, we had an amazing dinner and the company was even better. The next morning, we attended surgery and, in the afternoon, we heard first hand from Prof Itoi about the management of shoulder instability, Peripheral-Track and Central-Track Hill-Sachs Lesions, soon after, we were on our way back to Tokyo and a visit to the Funabashi orthopaedic hospital followed. Prof. Sugaya introduced us in the morning meeting after which we were presented the various surgical cases for the day. We hovered between the operation theatres and took in all the tips and tricks we could manage. The day continued with us attending the shin-toshi study group for surgery of the upper extremities where we listened to the presentation by Prof H. Ikegami on the treatment of proximal humerus fracture, we also had the chance to present our ongoing projects. Later-on we enjoyed a sushi master dinner in the company of Prof. Takase, Prof. Ikegami and Prof. Nakagawa and got to know them on a personal level.

On the 30th we had a brief visit to Showa university Fujigaoka hospital hosted by Prof Nishinaka, we attended surgery and discussed over lunch, then we headed to the airport to catch a flight to Fukuoka, where we spent the next three nights. We attended surgery in two different hospitals,

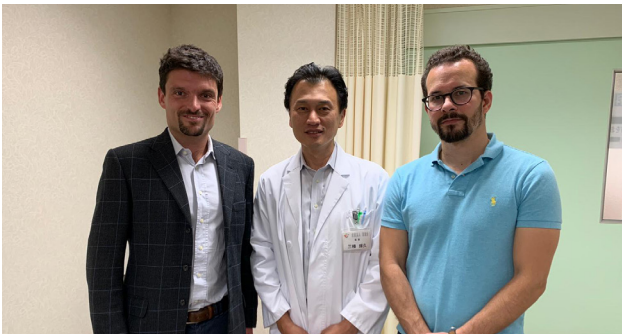
Fukuoka university hospital hosted by Prof. Izaki, and on the next day in Fukuoka university Chikushi hospital hosted by Prof. Shibata. We enjoyed dinner in the vibrant city of Fukuoka and the fellows were kind enough to show us around.

Next stop was in Nagoya hosted by Prof. Goto and Prof. Sugimoto. We attended Prof. Sugimoto's outpatient clinic in Nagoya sports clinic followed by surgery observation in Meitetsu hospital. Our stay in Nagoya was all about sports and culture, I watched my first ever rugby world cup final and our stay corresponded with the Japanese national day of culture which we spent in Kyoto and got a glimpse of the Japanese culture. Our final stop was in Osaka, we attended outpatient clinic with Prof. Mihata and learned about the suprascapular repair (superior capsule reconstruction) and its various implementations in the treatment of shoulder joint pathologies. We discussed about it all over a Goutallier grade 4 dinner.

In short, we had two amazing weeks, during which we got introduced to distinguished colleagues and their amazing achievements in the field of orthopaedics. The experience is one of a kind not only from the occupational, but also from the personal perspective, and if you are lucky you end up with a new friend or more. I would strongly recommend young upper limb surgeons from Europe to apply for the JSS-SECEC fellowship.

Thank you all...until we meet again

Best Regards, Bakir Sumrein



▶ 事務局からのお知らせ

日本肩関節学会会員の先生方、本年度もよろしくお願いいたします。

8月1日から2019年度(会期:2019年8月1日~2020年7月31日)が始まり、6か月が経とうとしております。

2019年12月末には先生方に2019年度の年会費の請求書をお送りさせていただきましたが、お手元に届きましたでしょうか。年会費のご納付をお願いするとともに、ご施設や現住所、メールアドレス等のご変更がございましたら同封のハガキまたはメール等にて事務局までご連絡をいただきますようお願い申し上げます。

また本ニュースレターでご案内いたしました、今期から準会員は準会員1号、2号と2種類に会員種別が分かれ、種別ごとに権利義務が異なります。また今まで日本肩関節学会学術集会と併設開催していた「肩の運動機能研究会」は、「日本肩の運動機能研究会」に名称を変え、新たに会員制の研究会として開催をしていきます。そのため、ニュースレターを製作している現在(2020年1月初旬)は、会員管理システムなどの修正変更を追われており、このニュースレターが発刊される頃にはすべてのシステムが改訂され、新たな気持ちで業務に臨む所存です。



一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society

Newsletter

編集

広報委員会

後記

西中直也

正月気分がようやく抜けて、日々の診療研究が本格的にスタートする頃でしょうか。今回の日本肩関節学会ニュースレターも皆さんから多くの魅力ある内容が届き、無事発行に至りました。執筆頂きました先生方、広報委員会の先生方、学会事務局の皆様感謝申し上げます。

最も大きなイベントである学術集会直前に、会場であった長野県は台風による甚大な災害を被りました。にもかかわらず例年通りに会が盛大に行われたことは学会長、理事長をはじめ、肩学会に携わるすべての方々の素晴らしいスピリットの賜物と考えます。また、日本肩の運動機能研究会の組織編制変更においては肩学会のさらなる発展が期待され気持ちが高揚します。

これら2つの内容をはじめ、ニュースレターを拝読すると令和2年となった本年も肩学会のさらなる飛躍の予感がします。会員の皆様にとって素敵な1年になりますように。



一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society

編集：一般社団法人日本肩関節学会 広報委員会

望月由（担当理事）、北村歳男（委員長）、新井隆三、石田康行、大前博路、菊川憲志、国分毅、小林勉、夏恒治、西中直也、松浦恒明、村成幸

発行：一般社団法人日本肩関節学会

〒108-0073 東京都港区三田 3-13-12 三田 MT ビル 8 階 株式会社アイ・エス・エス内

TEL03-6369-9981/FAX03-6369-9982

E-mail office@shoulder-s.jp URL <http://www.j-shoulder-s.jp/>